

ピジンとしての「協和語」の文法研究

— ケースマーカーを中心に —

劉 劍*

要旨

これまでのピジン研究は、英語との接触によって生じたさまざまなピジンが重視されてきたが、英語ベース以外のもの、たとえば1894～1945の間の中国語と日本語の言語接触によって生じたピジン（「協和語」と呼ばれている）についての記述や分析は、まだ十分にはなされていない。本研究は「協和語」の文法特徴を記述し、分析した上、その中のケースマーカーという部分を中心に論を展開する。利用可能な資料に基づいて分析を行い、「協和語」には助詞が大量に使われているにも関わらず、その大部分がケースをマークする機能を失っていることを明らかにし、「協和語」にはケースマーカーが存在しないという結論を見出す。

キーワード：「協和語」、ケースマーカー、助詞

1 はじめに

1.1 いわゆる「協和語」

「協和語」とは、1894～1945の間に日本語と中国語との接触から生じた一種のピジンのことを指す。中谷螢光生（1925）は、「メ

シメシ進上」「カイカイデガンホーチ（干活計）」「ターターデポコペン」「ニーヤブシンヂャナイカ」。こんな珍妙な言葉は、市内の随處否啻に大連のみならず、邦人の居住する中国の地の何處へ行つても日中間に猛烈に使はれてゐる。不自然な言葉、換言すれば所謂国籍不明の言葉である。…」と記している。この「不自然な」中日間のピジンは、本論文の扱う対象である。また、このピジンは歴史的にいろいろな名称で呼ばれたことがあるが、本論文は、研究上で慣用した名称にしたがい、「協和語」と呼ぶことにする。

これまでのところ、「協和語」についての研究は十分になされているとは言えないが、主に日本と中国で行われている。日本側には張（2011）、桜井（2015）、河崎（2016）などがあげられる。桜井（2015）は、新聞、戦争記念日、戦時記念日、軍用ポストカードなどを含め、最も包括的な歴史資料を収集し、初歩的な整理を行っている。河崎（2016）は、日本語と中国語の上海方言とのピジンを研究対象としている。中国側には、宮（2014）をはじめ、宮氏の一連の関連論文と、于、張（2014）が挙げられる。宮（2014）や于、張（2014）の「協和語」についての分析は、「奴隷教育の手段」などと述べ、社会言語学的視点に焦点を当てている。

* 中国：東北財経大学 国際商務外語学院 講師

ピジンとしての「協和語」についての研究は、社会言語学の分野で展開されてきたのは当然なことではあるものの、社会との関係のみに注目し、その社会的特性を強調することは、やはり不十分なところもある。ピジンまたはクレオール言語の各種類は、組織化された言語システムであることが無視できないため、まず、言語そのものとしての「協和語」について詳しく記述しなければならない。「協和語」はどのような言語であるのか？その音声、語彙、文法的な特徴は何なのか。どのような言語規則に従って働いているのか。「協和語」は中国語や日本語とはどのようにつながっているのかなど、基本的な記述が必要である。したがって、本論文はこれまでの先行研究に収集された歴史的資料にもとづき、「協和語」の言語特徴を記述することを目的としているが、紙幅のため、「協和語」という現言語の文法のサブフィールドとしてのケースマーカーの側面を中心に論を展開しようとする。

2 「協和語」のケースマーカー

本稿では桜井(2015)に収録された中谷(1925)の(26)–(34)節のデータに基づき、「協和語」のケースマーカーに関するものを整理し、記述的研究を行う¹⁾。ピジンは一般に口頭でのみ存在し、正式的に記録されるのは非常に珍しいが、当時中国・大連で生活していた中国語学者・教育者であった中谷螢光生は、この言語接触から生じた「国籍不明な言葉」を好ましからざる事態と考え、それと正しい中国語を対照し誤りを正すことを目的として、『満州日日新聞』の連載コラム「正しき支那語の話し方と日支合辨語の解剖」(1925)とそれをまとめた小冊子『日支合辨語から正しき支那語へ』(1926)を著した。本稿は中

谷(1925)を「協和語」の記録資料として利用する。また、その(26)–(34)節に焦点を当てたのは、最初の25節は語彙を中心としたのに対して、この9節は「ボーイに対して」「買い物について」「人力車及び馬車に対して」という実際場面における会話を記録したためである。

2.1 主格をめぐって

2.1.1 マークされるようにみえるもの

中谷(1925)の(26)–(34)節における会話文(延べ数72)を考察した結果、主格名詞のすぐ後の位置には「的」という語がよく現れることがわかった。

- (1)

| | | | | | |
|-----|-------|--------|------|------|-----|
| ワ | デ | キヌテヌ | ボンユー | フアンヅ | チュー |
| 我的 | 今天 | 朋友 | 房子 | 去 | |
| ニーデ | ショーシヌ | ショーシヌデ | フアンヅ | カヌカヌ | |
| 你的 | 小心 | 小心的 | 房子 | 看看 | |

私は今日友人を訪問に行くから、お前は
氣を付けて留守番せよ

(正) 我今天找朋友去, 你得小心看家

(中谷 1925 : 491)

- (2)

| | | | | |
|----|--------|-----|-----|-----|
| | ショーショー | | ニーデ | チュー |
| もう | 少々 | したら | 你的 | 去 |

今少し経つたらお前行け

(正) 等一会儿你去吧

(中谷 1925 : 490)

- (3)

| | | | | |
|------|------|-------|------|----|
| ニーデ | | カヌカヌ | | ホフ |
| 你的 | ペチカー | 看看 | せんから | 火 |
| トントフ | スーラ | | | |
| 通同 | 死了 | ぢやないか | | |

お前ペチカーを見ないから火がみな消
えてしまったではないか

(正) 你没看火炉子, 火都滅了

(中谷 1925 : 491)

- (4) ニーデ タバコ マイマイ チュー
 你的 烟草 買賣 去、
 ワイベンデ ターター リウター フシン
 外邊の 大々 留達 不行 ぢゃないか

お前煙草を買ひに行つて、何故外で遊んでゐるのか

(正) 你買烟捲兒去，怎么在外頭要呢

(中谷 1925 : 492)

- (5) ニーデ ショーシヌ デ カスカス ショート ルナーチュー
 你的 小心 的 看々 小盜兒 拿去
 フシン
 不行

お前泥棒に盗まれんやうに氣を付けてゐよ

(正) 你得小心看看，別叫小偷儿偷了去

(中谷 1925 : 491-2)

- (6) ホワイ ラ メーユー ニーデ イ コ メシメン
 壞 了 没有、 你的 一 個 飯々
 カスカス
 看看

腐つてはゐません、貴下一つ召し上がつて御覽なさい

(正) 不能爛，你嚙々一個看看

(中谷 1925 : 496)

- (7) ニーデ イチバ チュー アブラテイ メーユー デ
 你的 市場 去、油得 没有 的
 キューニク マイマイ ライ
 牛肉 買賣 來

お前市場へ行つて油身のない牛肉を買つて來い

(正) 你上菜市去，買瘦的牛肉來

(中谷 1925 : 489)

(1) - (7) における「的」については、まず、その発音がすべて「デ」と表記されているところから、日本語の「的(テキ)」より、中国語の「的(de)」の音声を引き継いでいることがわかった。しかし、文中における意味と機能から考えると、中国語の「的」とは

かに異なっている。『現代中国語800語』では、「的」について、次のように記述している。

1. 构成“的”字短语修饰名词; 2. 构成“的”字短语代替名词; 3. 构成“地”字短语修饰动词或形容词; 4. 构成“的”字短语作谓语; 5. 构成“的”字短语用在‘动+得’之后, 表示结果的状态; 6. 用在句子末尾, 表示一定的语气; 7. 其他用法²⁾

1. 「“的”字句」となって名詞を修飾する; 2. 「“的”字句」となって名詞の代わりに機能する; 3. 「“地”字句」となって動詞または形容詞を修飾する; 4. 「“的”字句」となって述語として機能する; 5. 「“的”字句」となって、「動詞+得」の後に出てきて、結果の状態を示す; 6. 特定のトーンを示すために、文末に現れる; 7. 他の用法。(筆者訳)

(1) - (7) における「的」は、主語のすぐ後に現れているものの、主語の所属形式にもなっておらず、「“的”字句」にもならないため、上記の中国語の「的」の7種の意味機能に属さないことが判断できる。つまり、(1) - (7) における「的」の使用は、中国語の構文ルールに従っていないと考えられる。たとえば、(6) はショッピングシーンにおける中国側の店員の発話であるが、その主語の位置に「你的」が現れている。「壞了没有、你的一個飯々好(腐つてはゐません、貴下一つ召し上がつて御覽なさい)」という。中国語の構文ルールによって理解すると、「的」を付け加えると、第二人称代名詞の所有形式が主語の位置を占めるようになり、「貴下のが一つ召し上がつて御覽なさい」と同じく、蛇足になるだけでなく、非文にもなる。

それに対して、(1) - (7) における「的」は、日本語の格助詞「が」として機能する、言い換えると、日本語の構文ルールにしたがって

考えれば、合理的になる。つまり、「的」は「が」と同じような文中位置に現れ、「が」と同じく語彙的な意味を持たず、文法的な関係を表すという機能を果たしている。

2.1.2 マークされないもの

上記の7つの例から、「協和語」は、語彙の面では中国語、文法の面では日本語を引き継ぎ、したがって「的」は日本語の格助詞「が」として機能するという結論を導こうとするように見えるが、しかし、事実はそれより複雑なのである。資料には、マーカーなしの実例も数少なくなく発見されている。

- (8) ^{キヌテス}今天 ^{ライライ}お客さん ^{ユーデ}來々 ^{ニーデ}有的、你的
^{フアンツ}房子 ^{デンホー}頂好 ^{ソーソー}に掃々しろ

今日はお客さんがあるから、お前部屋を掃除しろ

- (正) 因為今天有客，你把屋子好好兒的掃一掃/為今天有客，你得乾淨的掃一掃屋子
(中谷 1925 : 489)

- (9) ^{ワーデ}我的 ^{キヌテス}今天 ^{ワイベヌ}外邊 ^{チュー}去、^{ボンユー}朋友 ^{ライライ}來々 ^デ的
^{ワーデ}我的 ^{サヌテス}三點鐘 ^{ツン}的 ^デ回來 ^{ソイライ}說話。

私は今日外出するが、若し友人が来たら私は三時に歸りますと云へ

- (正) 我今天要出去，若是有朋友來了，你告訴他我三點鐘回來
(中谷 1925 : 489)

- (10) ^{チヤカ}這個 ^{ターター}大々 ^{あた}新しい、^{メシメシ}さしみ飯々
^{デンホー}頂好

これは非常に新しいから、刺身にして召し上がると好いです

- (正) 這是很新鮮的，做生魚片兒吃很好
(中谷 1925 : 495)

- (11) ^{チヤカ}這個 ^{ホワイラ}壞了 ^{メーユー}沒有 か

これは腐つてはゐないか
(正) 這個爛了沒有

(中谷 1925 : 495)

- (12) ^{おく}奧さん ^{シヨマ}甚麼 ^{マイマイ}買賣

奧さん何をお買いになりますか
(正) 太々買甚麼

(中谷 1925 : 493)

上記資料には、主語が「的」でマークされる例とマーカーなしの例以外には、他のマーカーで主語をマークする例が発見されなかった。つまり、文によって、「的」でマークされるかされないかということとなっている。したがって、どのような状況で主語が「的」でマークされ、どのような状況で主語が「的」でマークされないのかという問題がわいてくる。上記の例から観察すれば、違いは主語そのものにあるらしい。主語が「我的(私)」「你的(貴方)」のような人称代名詞である場合、特に第一、第二人称である場合には、「的」が付いているのが多い(40例)。逆に、第一、第二人称代名詞が主語となる例においては、「的」を伴わないものが見つからなかった。それに対して、主語が人称代名詞以外、たとえば、「お客さん、朋友」のような名詞、あるいは「這個」のような指示代名詞である場合、一般的に「的」が付いていない(10例)。普通名詞の後に「的」が使われた例もあるが、2例しか発見されていない。以下のとおりに示す。

- (13) ^{ホワ}火 ^デ的 ^{カイカイデ}快々の ^{スーラ}死了, ^{シヨシヨ}少々 ^{メータス}煤炭
給

火がもう消える、少し石炭をつけ

(正) 火快要滅了, 添上点儿煤罷

(中谷 1925 : 492)

- (14) ^{チャカ}這個 ^デ的 ^{ターター}大々 ^{スツ}酸ばい ^{スツ}酸ばいの、
^{じんじょう}進上 ^{ウーデ}しても ^{フヨー}我的 不要よ

これは馬鹿に酸ばい、呉れても要らないよ

(正) 這個很酸、你給我也不要

(中谷 1925 : 496)

本節では、主格のマーカーについて考察を行ったが、人称代名詞が主格となる場合は、「的」でマークされ、それ以外の場合は、マーカーなしという傾向が見られる。一般的に、ピジンは「簡略化」という普遍的なルールを守っているはずであるとはいえる。たとえば、もともと屈折変化を持っている言語がピジンに入ると、屈折による語形変化を失うという傾向が数多くのピジン研究によって報道されている。ピジンとしての「協和語」も他のピジンと同じように振舞うと考えれば、日本語の格助詞が「協和語」に入ると、なくなることも不思議ではない。しかし、それが時にはなくなり、時には中国語から借用した「的」形式となるということは問題となる。それはなぜなのか。まずは、「協和語」はピジンとしての不安定性を持っている。つまり、中国語と日本語という二つの言語が融合する過程で、格助詞が簡略化されつつあり、残るか、それともなくなるかはまだ落ち着いていないことが考えられる。しかし、この説によれば、なぜ人称代名詞が主語である場合にしか日本語の格助詞が保持され、人称代名詞以外の場

合はそれが保持されないということが説明できない。もう一つの可能性として考えられるのは、「你的、我的」などのような「人称代名詞+的」というものは、「主格名詞+主格マーカー」という文法レベルの単語と単語の組み合わせではなく、語彙レベルのもの、つまり、ひとまとまりの語として働くことである。つまり、「你的」、「我的」は全体で一つの単語として「協和語」に取り入れられたのである。前にも触れたように、第一、第二人称代名詞が主語となる例においては、「的」を伴わないものが見つからなかった。言い換えれば、「我」「你」は独立して上記資料に記載された「協和語」文に出てきたことはないため、独立した単語とは考えられにくい。それに反して、「人称代名詞+的」、つまり「我的」「你的」という形式は一つの単語として文の主格になっていると考えられる。また、上記資料には以下のような「你的」と「に」、「我的」と「に」が共に現れる例が発見された。

- (15) ^{ニーデ}你的 ^に ^{チャカ}這個 ^{シンジョウ}進上 ^{するから}
^{テンホー}頂好 ^{ジュー}洗々 ^{して} ^{イシャン}衣裳 ^{ガンホ}幹活 ^{ホー}好

これをお前にやるから好く洗つて着ると好い

(正) 我給你這個, 你得乾淨的洗一洗穿々罷

(中谷 1925 : 492)

- (16) ^{ニーデ}你的 ^{ワーデ}我的 ^に ^{ソーホフ}説話 ^{メーユー}沒有 ^{で、}
^{ワイベス}外邊 ^{チュー}去 ^{フジン}不行ぢやないか

お前私にだまつて外へ出てはいけいではないか。

(正) 你沒告訴我出去不行啊

(中谷 1925 : 490)

「的」が「協和語」において「が」として機能するというふうに仮定するなら、「的」が「に」と共に現れるのは、「が」+「に」に相当する。「お前がにやる」とか、「私に黙る」とかは、日本語では非文であり、不合理である。また、「が」は時には「は」に置き換えられた場合があるが、「は」と「に」の組み合わせは「には」であり、「はに」ではない。「お前にはやる」とか、「私には黙る」とかは、また不合理である。(15)における「你的に」、(16)における「我的に」はもはや「人称代名詞+に」のようにみえる。いいかえれば、「你的」、「我的」はひとまとまりの人称代名詞として機能を果たすのであろう。

それ以外に、「人称代名詞+的+の」の例も見られた。

- (17) ^{ニーデ} 你的 ^{マイマイ} 買賣 ^{シエモシエモ} 甚麼々々 ^{フホー} 不好、^{セス} 錢 ^デ 的
^{タクイ} 太貴、
^{ワーデ} 我的 ^{ニーデ} 你的 の ^{マイマイ} をもう買賣 ^{メーユー} 沒有 ^デ よ

お前は何んでも悪いし、値段も高いから、お前のは買はないよ

(正) 你賣的無論甚麼都不好，價錢也太貴、所以我再也不買你的了

(中谷 1925 : 497)

- (18) ^{ワーデ} 我的 ^{マイテスマイテス} 每天每天 ^{ニーデ} 你的 の ^{マイマイ} を買賣するぢやないか

私は毎日（又は常々）おまえから買ふではないか

(正) 我不是天天兒買你的麼

(中谷 1925 : 494)

- (19) ^{ワーデ} 我的 ^{クツ} の 靴 ^{スイ} 水 ^{ターターデ} 大々的、^{ワイベン} 外邊
^{ナーチユエ} 拿去 ^{タイヤン} 太陽 ^デ 的 ^{ケイ} 給、^{マンマンデ} 慢々の ^{スイ} 水
^{トントン} 通通 ^{メーユーラ} 沒有了、^{テンホー} 頂好 ^デ 的 ^{ソーソー} 掃々

私の靴が大へん濡れているから、外へ持つて行つて、干して乾いたら、好く磨け
 (正) 我的鞋太濕了，拿到外頭去給太陽
 (日頭) 晒々，等着乾了，好好兒的刷一刷

(中谷 1925 : 493)

以上の三例における「的」は日本語の「が」として考えれば、(17) - (19) は「お前がの」となり、中国語の「的」として考えれば、(17) - (19) は「お前のの」となるため、合理的ではないのである。やはり文法レベルの「人称代名詞+助詞+助詞」の組み合わせより、「你的」、「我的」はひとまとまりの単語であるという説が合理的なのであると考えられる。

要するに、本論文は、(1)～(7)における「的」は、主格のケースマーカーではなく、むしろ「協和語」特有の人称代名詞の非独立成分であると主張する。つまり、蛇足に見えるにも関わらず、「協和語」における「你的」、「我的」などの「人称代名詞+的」という形式は、日本語の「お前、私」、または中国語「你、我」などの人称代名詞と同じように振舞う。これは、(1)～(7)の主語がすべて(8)～(12)と同じく、マーカーなしという形式をとるということを意味する。そして、(13) (14)を「的」の用法の拡張と考えられる。

2.2 目的格をめぐる

本節では、目的格のケースマーカーについて考察を行うことにする。

2.2.1 マークされるもの

2.2.1.1 「を」

日本語の目的格のケースマーカー「を」がそのまま「協和語」に引き継げられる例が二つ見られた。

- (20) ^{ニーデ} 你的 ^{マイマイ} 買賣 ^{シエモシエモ} 甚麼々々 ^{ブホー} 不好、^{セヌ} 錢 ^デ 的
^{タクイ} 太貴、^{ワーデ} 我的 ^{ニーデ} 你的 ^の を ^{マイマイ} もう買賣
^{メーユー} 沒有 ^よ

お前は何んでも悪いし、値段も高いから、
お前のは買はないよ

- (正) 你賣的無論甚麼都不好，價錢也太貴
、所以我再也不買你的了
(同 17) (中谷 1925 : 497)

- (21) ^{ワーデ} 我的 ^{マイテヌマイテヌ} 每天每天 ^{ニーデ} 你的 ^の を ^{マイマイ} 買賣
するぢゃないか。

私は毎日 (又は常々) おまえから買ふで
はないか

- (正) 我不是天天兒買你的麼
(同 18) (中谷 1925 : 494)

上記資料に記載された「協和語」には、日本語の主格マーカーとしての「が」が見られたことが全くないのに対して、目的格マーカーとしての「を」が二例見られた。これは、偶然なのか、それとも主格より、目的格をよりマークする必要があるという潜在的な言語意識が働いていたか結論づけにくいだが、少なくとも、日本語の主格と目的格は、ピジンとしての「協和語」に入る際、振る舞いが異なることがわかった。

2.2.1.2 「的」

目的語をマークするものは、日本語から持ってきた「を」以外に、中国語から持ってきた「的」の例を 3 例見られた。

- (22) ^{ワーデ} 我的 ^の ^{カツ} 靴 ^{スイ} 水 ^{ターターデ} 大々的、^{ワイベン} 外邊
^{ナーチュー} 拿去 ^{タイヤン} 太陽 ^デ 的 ^{ケイ} 給、^{マンマンデ} 慢々の
^{スイ} 水 ^{トントン} 通同 ^{メーユーラ} 沒有了、^{テンホー} 頂好 ^デ 的 ^{ソーソー} 掃々

私の靴が大へん濡れているから、外へ持つて行つて、干して乾いたら、好く磨け
(正) 我的鞋太濕了，拿到外頭去給太陽
(日頭) 晒々、等着乾了、好好兒的刷一刷
(同 19) (中谷 1925 : 493)

- (23) ^{ニーデ} 你的 ^{メシメシ} 飯々 ^{ワヌ} 完 ^ラ 了 ^デ 的、^{チヤカ} 這個
^デ 的 ^{ターデ} 他的 ^{フアンツ} 房子 ^{ナーチュー} 拿去。

お前飯が済んだらこれを彼の家に持つていけ
(正) 你吃完了飯、就把這個送到 (拿到) 他家去
(中谷 1925 : 489)

- (24) ^{ニーヤ} 你呀 ^{チヤカ} 這個 ^デ 的 ^{イテヌ} 一天 ^{リヤンテヌ} 兩天
^{マヌマヌ} 漫々 ^デ 的 ^{めしめし} 飯々 ^{ホワイラ} 壞了 ^{メーユー} 沒有か

これを一日二日置いてから喰べても腐つてあるやうなことはないか
(正) 這個攔一兩天就吃不能爛麼
(中谷 1925 : 495)

上記の (22) - (24) における「的」は『現代中国語 800 語』に記載した「的」の意味用法に当てはめられないため、中国語の「的」をそのまま「協和語」に持ってきたというわけにはいかない。文中に現れる位置は、目的語の直後、しかも動詞の前というようなどころから考えると、以上の 3 例における「的」は、日本語の目的格をマークする格助詞「を」に対応するものである可能性が高い。中国語の「的」(修飾関係などを表す助詞)として意味が漂白され、つまり、語彙としての意味を持たず、文法的な関係のみを示すようになっていく。

また、(22) - (24) の「的」は、(1) - (7) とは異なり、人称代名詞の後には現れたので

はない。人称代名詞が「第一、第二、第三」というふうには制限されているとは異なる名詞は制限されず、オープンである。上記の「名詞+的」との組み合わせは、一つの単語である可能性が非常に低いと考えられる。したがって、語彙レベルの単語であるという分析とは違い、文法的な組み合わせであると判断する。つまり(22)–(24)における「的」は日本語の「を」の対応者として働いていると結論づける。

前節の分析によって、日本語の主格助詞「が」は「協和語」にほとんど引き受けられなかったことがわかった。それに対して、本節では、目的格助詞「を」は、日本語の「を」のままの形式と中国語から借りた「的」の形式で、「協和語」に引き受けられたことがわかった。注意されたいのは、目的格は主格と違い、「協和語」に入る際、異なる振る舞いを示した、いかにすれば両者の間には不均衡性がみられることである。その理由についてさらなる検討が必要であると思われるが、本論文では紙幅のため、深入りはしないようにする。

2.2.2 マークされないもの

「協和語」の各文の目的語は日本語からの「を」と中国語からの「的」でマークされたことは前節で取り扱ったが、本節では、何もマーカーもない場合について考察しようとする。文法的に目的格だと判断できるが、マーカーなしの例は、すべて15例が見られたが、その代表例を次のように示す。

- (25) ^{ニーデ}你的 ^{タバコ}烟草 ^{マイマイ}買賣 ^{チュウ}去、^{ワイベンデ}外邊的
^{ターター}大々 ^{リウター}留達 ^{フシン}不行 ^{チャナイカ}じゃないか

お前煙草を買ひに行つて、何故外で遊んでゐるのか

- (正) 你買烟捲兒去，怎么在外頭要呢
 (同4) (中谷 1925 : 492)

- (26) ^{ニーデ}你的 ^{イチバ}市場 ^{チュウ}去、
^{アブラテイ}油得 ^{メーユー}沒有 ^デ的 ^{ギューニク}牛肉 ^{マイマイ}買賣 ^{ライ}來

お前市場へ行つて油身のない牛肉を買つて來い

- (正) 你上菜市去，買瘦的牛肉來
 (同7) (中谷 1925 : 489)

- (27) ^{アツ}熱い ^{アツ}熱い ^デ的 ^{チャ}お茶 ^イ一個 ^{ナールイ}拿來

熱いお茶を一杯持つて來い

- (正) 拿一碗熱茶來
 (中谷 1925 : 491)

- (28) ^{カイカイ}快々 ^デ的 ^{メシメシ}飯々 ^{ガン}幹活 ^{ホー}計 ^{ホー}好

早く飯を喰べろ

- (正) 快々兒的吃飯罷
 (中谷 1925 : 489)

- (29) ^{キヌテエヌ}今天 ^{ターター}大々 ^{サム}寒い ^{サム}寒い、^{カイカイ}快々 ^デ的
^{ホウ}火 ^{ガン}幹活 ^{ホテ}計

今日は大へん寒い、早く火をおこせ

- (正) 今天很冷，快々兒的弄火罷
 (中谷 1925 : 491)

- (30) ^{ワーデ}我的 ^{メシメシ}まだ ^{メーユー}飯飯 ^{メーユー}沒有、
^{ニーデ}你的 ^{カイカイ}快々の ^{メシ}飯 ^{ガン}幹活

私はまだ飯前だから、お前早く飯を焚け

- (正) 我還沒吃飯哪，你得快々兒的做飯
 (中谷 1925 : 491)

(31) ^{ホフ}火 ^デ的 ^{カイカイ}快々 ^{スーラ}的 死了,
^{シヨシヨ}少々 ^{メータス}煤炭 ^{ケー}給

火がもう消える、少し石炭をつけ

(正) 火快要滅了, 添上点儿煤罷

(同 13) (中谷 1925 : 492)

数の観点から見ると、「目的語+動詞」が出てくる場合、マーカーなしの例(15例)はマーカー(「を」か「的」)の付いている例(3例)より圧倒的に多い。これは、もともと日本語の目的格のマーカー「を」は、ピジンとしての「協和語」に入る際、一部が保持されながらも、一部が中国語の語彙「的」に置き換えられ、そして、両者は融合し簡略化されつつある過程でだんだん落ちてしまい、ゼロ形式になる結末だということを意味するのかもしれない。

2.3 その他

2.3.1 「に、の、で」

2.1節は主格、2.2節は目的格を中心に考察をおこなったが、それ以外に助詞「に、の、で」の例もいくつか発見された。(15) - (19)にも少し触れたが、それ以外に、また以下の例がある。

(32) ^{ニーデ}你的 ^{あと}後 ^{チャカ}で ^{テンホー}這個 ^{シーシー}頂好に ^{洗々}洗々、
^{わす}忘れる ^{テシン}で不行よ

お前後でこれを好く洗へ、忘れてはいけないよ

(正) 回頭你把這個好々兒的洗一洗, 別忘了 / 回頭你把這個想着乾淨的洗一洗

(中谷 1925 : 490)

(33) ^{ニーデ}你的 ^{ガヌホデ}幹活計 ^{メーユー}沒有 ^{とき}の 時、
^{イモー}一毛 ^{セヌ}錢 ^{ホー}好 ^{ソホフ}說話 ^{した}したぢゃないか

お前乗るときに、十錢で好いと云ふたではないか

(正) 上車的時候兒, 你不是說一毛錢

好麼

(中谷 1925 : 498)

(34) ^{ニーデ}你的 ^{ワーデ}我的に ^{ソーホフ}說話 ^{メーユー}沒有 ^でで、
^{ワイベス}外邊 ^{チュウ}去 ^{フシン}不行ぢゃないか

お前私にだまつて外へ出てはいけいではないか。

(正) 你沒告訴我出去不行啊

(同 16) (中谷 1925 : 490)

また、日本語の助詞「で」、もしくは「で」の「協和語」における対応者を使用してもまったく不自然ではないものの、実際には「で」格構造を避けている例もある。

(35) ^{ツクエ}机 ^デ的 ^{シヤンベン}上邊 ^{ターターデ}大々的 ^{キタナ}汚い、
^{ニーデ}你的 ^{シウキヌ}手巾 ^{ナーライ}拿來 ^{テンホー}頂好 ^{ガンホ}幹活

机の上が大へん不潔だから、お前雑巾を持つて來て拭け

(正) 桌子上很臟了, 你拿展布來, 好好兒的擦一擦

(中谷 1925 : 493)

(35)は、「雑巾で拭け」という簡単な日本語の構文をそのまま「協和語」に持ってきて使用する方法も考えられる。しかし、中国語と日本語は文法的に異なっているため、日本語なりの「で」格構造を用いて中国人相手に情報を伝えるのがなかなかむずかしい。また、「で」にあたる中国語の語彙を探す方法もあるが、主格「が」や目的格「を」が中国語の「的」

に当てはめられたのに対して、道具格「で」はなかなか「的」に当てはまらないように考えられる。それをはっきりと意識して、「協和語」話者は「で」格構造の使用を避けていたように見える。その結果、「で」は「を持ってきて」という動詞に置き換えられたのであろう。

「協和語」の文法は日本語から提供されていると先行研究によく指摘されているが、しかし、「協和語」は日本語の文法を 100 パーセント受け入れられたわけではない。(35)から考えれば、「で」格構造は「協和語」の日本語文法の受け入れの限界であると主張する。つまり、大まかにいうと、「協和語」は日本語の文法を引き継いでいるものの、その受け入れは主格や目的格のような日中間共通のもの、さらにいうと、通言語的な格に止どまり、それよりさらに深く日本語文法から(たとえば、「で」格構造を)の取り入れはできなかつたと考えられる。本論文は助詞やケースマーカーを対象にしてきたが、それ以外の文法の各方面、たとえば、語順、否定、時制などの面でも、類似したことが観察された。要するに、「協和語」が日本語文法を受け入れるのに限界があり、助詞の面からみれば、「で」格構文がその限界である。

2.3.2 「的」

2.1 節と 2.2 節で、日本語の「が」に対応した「的」と、日本語の「を」に対応した「的」を扱ったが、それ以外の助詞、たとえば「に」か「で」に相当する「的」の用例もみられた。以下のとおりに示す。

- (36)

| | | | | | |
|-------|------|----|-------|------|-------|
| ワーデ | クツ | スイ | ターターデ | ワイベン | ナーチュー |
| タイヤン | 的 | 給 | 曼マンデ | スイ | トントン |
| 太陽 | 的 | 給 | 慢々の | 水 | 通同 |
| メーユーラ | テンホー | デ | ソーソー | | |
| 沒有了、 | 頂好 | 的 | 掃々 | | |

私の靴が大へん濡れているから、外へ持つて行つて、干して乾いたら、好く磨け
(正) 我的我的鞋太濕了，拿到外頭去給太陽(日頭)晒々、等着乾了、好好兒的刷一刷 (同 19、22) (中谷 1925 : 493)

- (37)

| | | | | |
|------|-------|------|---------|------|
| メイタヌ | トントンデ | メーユー | しよーしよーデ | ナーライ |
| 煤炭 | 通同的 | 沒有、 | 少々の | 拿来 |

石炭が少しもない、少し持つて來い
(正) 煤炭一點兒也沒有了，拿一點兒來
(中谷 1925 : 492)

ただし、これらの「的」が省略された例も少なくない。

- (38)

| | | | | | |
|------|------|----|-----|------|---|
| キヌテヌ | ターター | サム | サム | カイカイ | デ |
| 今天 | 大々 | 寒い | 寒い、 | 快々 | 的 |
| ホフ | ガンホフ | | | | |
| 火 | 幹活計 | | | | |

今日は大へん寒い、早く火をおこせ
(正) 今天很冷，快々兒的弄火罷
(同 29) (中谷 1925 : 491)

- (39)

| | | | | |
|------|------|-------|------|----|
| ニーデ | | カヌカヌ | | ホフ |
| トントン | ベチカー | 看看 | せんから | 火 |
| 通同 | 死了 | じゃないか | | |

お前ベチカーをみないから火がみな消えてしまったではないか
(正) 你没看火炉子，火都滅了
(同 3) (中谷 1925 : 491)

(36)の「大々の」に対して、(38)には「大々」が現れた。(37)の「通同的」のに対して、(39)には「通同」が出てきた。「的」が省略されたのは偶然なのか、それとも何らかの規律が潜んでいるかはまだ判断しにくい。

3 結論

今までのピジン研究は、さまざまな英語とヨーロッパ語をベースとしたものに焦点を当ててきた。英語やヨーロッパ語以外のものから生じたピジンは十分な注意を集めていないのが現状である。本研究では、その偏りを補うために、貴重なピジンの記録資料——中谷(1925)に基づき、中国語と日本語の間から生じたピジン——「協和語」を中心に考察を行い、その基本的な言語記述を提供することを目的とする。発音、語彙、文法という各方面で「協和語」を記述しようとするが、本論文では、紙幅のため、そのごく一部であるケースマーカーの記述を中心に論を展開した。

まず、「協和語」には、名詞の後という位置に、日本語の助詞そのままか中国語から持ってきた「的」かが数多く現れていることがわかった。日本語の助詞そのまま使用された例においては、助詞がケースマーカーであると考えられるが、しかし、中国語から持ってきた「的」の使用例より、数が圧倒的に少ない。

一方で、中国語から持ってきた「的」は日本語の助詞に対応して使用されていたと考えられるが、ケースマーカーとは言えない。つまり、「協和語」においては、主格も目的格もそれ以外の助詞「に」なども、すべて一つの「的」に対応している。したがって、「的」が格を区別しマークする機能を失っているのである。言い換えれば、日本語の格助詞が格をマークする機能を果たすのに対して、「協和語」における「的」は格をマークすることができない。

そして、「で」格構造の使用は「協和語」話者に避けられていたことが(35)からわかった。換言すれば、日本語の主格「が」や目的格「を」などはそのままの形式か中国語から

借りた「的」の形式かで「協和語」に入ったのに対して、道具「で」格は「協和語」に受け入れられなかったのである。つまり、「協和語」が日本語から文法を取り入れる際、日本語らしさによって、受け入れる程度が違ってくる。道具「で」格くらいのところまで、「協和語」は留まっていた。

また、主格であれ、目的格であれ、日本語の助詞がそのままの形式で「協和語」に使用された例があるものの、数が少ない。日本語の助詞より、中国語から持ってきた「的」のほうが数多く使われている。また、日本語の助詞も、中国語から持ってきた「的」も使わず、つまり、マーカーなしの例が、さらに多い。以上の数から、ベースとなっている日本語が如何にピジン化によって簡略化されたかという経路が伺われるのであろう。つまり、日本語の助詞がそのまま保持→日本語文法によって助詞を使用しようとするが、助詞そのものが中国語の「的」に置き換えられる→「的」がさらに脱落し、すなわちマーカーなしという形式に置き換えられるということが推測できるのであろう。

[注]

- 1) 中谷(1925)からの引用例のページ数は桜井(2015)に所収したものに準ずる。
- 2) 『現代漢語八百詞』増訂本、呂叔湘(編), 商務印書館, 2016. pp.155-166.

【参考文献・資料】

- 宮雪. “协和语”研究 [D]. 东北师范大学博士論文, 2014
- 沈家煊. 英汉否定词的分合和名动的分合 [J]. 中国语文, 2010 (5)
- 于湘泳、张守祥. 日伪时期的“协和语”新考

[J]。边疆经济与文化。2014（6）

張守祥。「満州国」における言語接触——新資料に見られる言語接触の実態—— [J] . 学習院大学人文, 2011（10）

桜井隆。戦時下のピジン中国語 —— 「協和語」「兵隊支那語」など—— [M]. 三元社, 2015

河崎みゆき。戦時下上海の日本語教科書——上海租界工部局発行『日本語教科書』—— [J]. 国学院大学日本語教育研究, 2016（7）

吕叔湘。现代汉语八百词。增订本。商务印书馆, 2016

罗纳德·沃德华。《社会语言学引论》第五版。雷红波译。复旦大学出版社。2009

A Study of Grammar Feature of Xiehe Pidgin -From the viewpoint of case marker

LIU JIAN

Lecturer , School of International Business Communications
Dongbei University of Finance and Economics

Abstract

Although former research of pidgins focused their studies on various English pidgins resulted from the language contact between English and other languages, non-English-based ones, such as the pidgin produced by language contact between Chinese and Japanese between 1894 and 1945 (known as “XIEHE”) is not yet sufficiently described. This paper aims to describe grammatical features of “XIEHE” pidgin, focusing on the analysis of the case marker in it. Based on available materials, the paper revealed that most of particles have lost their ability to mark cases, despite the fact that a large amount of particles are used in the sentences in “XIEHE” pidgin. In other words, there is no case marker in “XIEHE” pidgin.